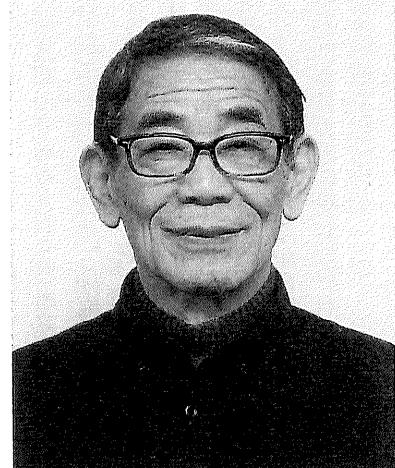


渡辺利夫

拓殖大学学事顧問



歴史から読み解く 台湾の親日、韓国の反日

民進党の蔡氏が圧勝した台湾総統選

本誌今号は「中華帝国主義と日本・台湾・香港」に焦点を当てているのですが、先生には台湾と韓国との対日感情の違いについてお話をいただけるということで、よろしくお願ひいたします。

渡辺 いただいたテーマの背後には、もちろん覇権を拡大する中国の存在があるわけですが、今回は台湾と韓国について、まずはお話ししてみたいと思います。

「どうして台湾はあれほど親日的なのか」。一方、対照的に「どうして韓国はそこまで徹底的に反日なのか」ということです。

このたび台湾の総統選挙（一月十一日）がありました。結果を見ての私の感想からお話しします。

この総統選では、現職の蔡英文さんが大勝しましたね。また同日の、立法院の立法委員——これは日本でいう国会議員に相当しますが、その立法院選でも、蔡さんの与党である民進党がマジョリティーを確保しました。

総統選については日本でも随分と報道され、論評も出尽くした感がありますが、私はどんなふうに見ていくか。

日本の新聞は「対中強硬派の蔡さんが、対中融和派の国民党の韓國瑜（高雄市長）さんを、史上最多得票数で破った」と、そう書いています。

それはそれで確かに、かつ中国に対して強硬な民進党の蔡さんが当選したことは、これは慶事だとすることに、私も全くやぶさかではありません。

しかしながら、「台湾もこれからが大変だな」という感じもするのです。

未だ引きずる「省籍矛盾」—— 社会統合へ台湾総統の苦悩は続く

渡辺 台湾というのは「同質社会」ではありません。移民社会です。十七世紀の後半期、中国では明朝が終わって清朝に入る頃ですが、この時代に対岸の福建省や広東省から、たくさんの人々が台湾海峡を渡つて台湾島にやってきました。それが現在の台湾住民の大多数で、「本省人」と呼ばれる、台湾に根付いた漢族の人たちですね。

(わたなべ・としお)

昭和十四年、甲府市生まれ。慶應義塾大学経済学部卒。同大学大学院修士・博士課程修了。経済学博士。筑波大学教授、東京工業大学教授を経て拓殖大学教授。同大学元学長・前総長。(公財)オイスカ会長なども務める。『成長のアジア 停滞のアジア』で吉野作造賞、『開発経済学』で大平正芳記念賞、『西太平洋の時代』でアジア・太平洋賞大賞、『神経症の時代』で開高健賞。ほか著書多数。

写真・森村友紀



ところが第二次大戦で日本が負けて日清戦争後から統治していた台湾を放棄した時、再び大陸から、蒋介石の率いる中国国民党の軍人・軍属がなだれ込んでしまいました。これが「外省人と呼ばれる人々です。この国民党政府（中華民国）の「外省人エリート」は、専制政治を台湾に敷きました。苛烈で強権的な支配でした。

一九四七年には、外省人の官憲による本省人女性への暴行事件をきっかけに本省人による抗議デモが起きた、そのデモに向けて政府の憲兵隊は無差別に発砲しました。二・二八事件です。本省人の外省人に対する

蜂起ですが、これを契機に、外省人エリートによる本省人への徹底的な弾圧が長く続き、多くの人たちが殺害されてしまいました。この二・二八事件が台湾に非常に深い傷を残しました。

「省籍矛盾」という言葉がありますが、この矛盾の中で台湾は戦後の七十年間、揺れ動いてきたと言つてもいい。分かりやすく今の政党勢力で言うと、中国国民党（国民党）と民主進歩党（民進党）ですね。ようやく民主化された八〇年代の後半以降は、この二つの政党の政権が入れ替わりを繰り返しています。

この省籍矛盾という問題は、じつに複雑で微妙な問題です。この矛盾が煽られると台湾社会は非常に不安定化します。今回の總統選を見てみると、「この矛盾が掘り起こされて、台湾の傷は一段と厳しいものとなつたのではないか」という感想を持ちました。

今回は特に、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）を使った凄まじい中傷合戦が両陣営間でありました。フェイクニュースも飛び交いました。国民党の背後には中国の影がちらついていました。SNSというものは社会を統合に向かわせるという要素もあるけれど、分断させていく危険な可能性もあると

感じさせられます。

七十年以上も抱え込んでいる問題の傷口が、いつそ大きくなつたのではないか。この傷をどうやって癒すのか。大変に難しい問題を蔡さんは抱え込んだ……。そう私は思った次第です。もちろん蔡さんの勝利は慶事ですし、見事な民意決定でした。しかし社会統合というテーマから見ますと、蔡さんは台湾社会を、これからどう舵取りしていくのか。「台湾のトップは大変だな」という複雑な気分を私は拭えないんです。

台湾の歴史は「族群」が入り乱れる無秩序の連続だつた

それではなぜ台湾はこれほどまでに親日的なのかについて考察していただければと思います。

渡辺 それは台湾の歴史に由来しています。「省籍矛盾」と言いましたけれど、台湾には「族群」という言葉があつて、これが社会のキーワードになつています。

先ほど申しましたように、十七世紀後半、明末から清の初めの頃、対岸から泉州人や漳州人、それから客家など、それぞれ言語や風俗習慣を異にする人たち

が、移民として台湾に入つてきました。もともと台湾には、マレー・ポリネシア系の先住民がいましたが、これは族群により山間地に追いやられてしまいました。そして移民たちは肥沃な平地に住み、田畠を経営し始めたわけです。彼らがのちの本省人ということになるわけですが、当初、その移民たちが仲良くやつていたかというと、言語も風習もそれぞれ違うので、年中、いざこざが絶えなかつたんです。先住民族は山間部へ追いやられたけれど、今度は、移住してきた族群同士が、政治権力を求め、あるいは田畠の所有権を巡つて激しく競い合う。「分類機闘」と言います。原籍を異なる「族群」の闘争という意味ですが、それが年中、起こつていきました。当時の台湾は手に負えない土地という感じだつたんですね。

明末の十七世紀後半の時点で、初めて台湾は中国の版図になりました。明朝は清朝に代わりますが、その清には台湾を開拓・経営しようなどという意図は全くなかつた。台湾はむしろ蛮夷の住む「化外の地」であり、住んでいるのは「化外の民」だと侮蔑していたのです。

そうした手の施しようのないほどの混沌が当時の

台湾でした。やがて日清戦争があり、日本が勝ち、下

関講和条約が結ばれて、台湾は日本の統治下に入ります。ですから日本も、「ひどい所を領有することになつたな」という感じだつたんでしょうね。

どんな人種であれ、他國の人種に支配されるのは嫌

ですよね。台湾住民も当然、反日武装闘争をやりました。大陸の清国からも兵隊さんが呼び寄せられ、現地の人たちが武器を持って日本の陸軍と戦つたのです。私はこれを「もう一つの日清戦争」と呼んでいるんですが、この戦いで相当の台湾住民と、住民と戦つた日本兵が死んでいます。

台湾には熱帯特有のマラリアやペストやコレラなどが蔓延していて、日本は反日武装勢力と戦いながら、熱帯病とも戦うはめとなりました。

加えて、驚くべきことに当時の台湾では、アヘンの常習吸引者の数が凄まじかっただんです。そんな人間たちを統治するのは至難です。

台湾は当時、「難治の島」だといわれ、今では信じられないような話ですが、帝国議会で台湾売却論が眞面目に論じられたほどなんです。フランスは台湾に関心があつたようです。フランスに売却したらどうかとの

議論があつたほどです。

台灣を短期間で財政自立させた日本の統治

渡辺 しかしここで強調したいのは、これらの初期の困難を克服すれば、日本の台湾統治を遮るものは何もなくなつたということです。あとで言いますけど、朝鮮の場合は、五百年以上続いてきた李王朝があつて、それを引き継いだ朝鮮統治をするというのは、これはなかなか大変なことでした。

でも台湾には当時、社会統合もなければ、伝統的な秩序もない状態ですから、初期の困難をクリアしてしまえば、あとは統治を阻むものは何もなかつたというわけです。

話を進めれば、第四代総督として、あの司馬遼太郎の『坂の上の雲』で有名な児玉源太郎が赴任し、比類のない政治を敷く。その時、民政のほうは全て後藤新平に任せた。この二人の尽力で、一人のデザイン通りに、台湾の開発は大きく進みました。「児玉・後藤政治」と言つてますが、これによつて今の台湾につながる社会的な秩序や規範が整えられたんだと私は見ていま

す。また基隆から高雄に至る台湾縦貫鉄道を敷き、その両市には港も築き、さらに製糖をはじめとした産業開発もありました。

そして驚くべきことに、統治が始まつて十年後には、台湾は財政自立を果たしました。これは世界の植民地史でも例のないことです。朝鮮統治のほうは、最後まで一方的に日本の赤字だつたのと対照的です。

民主化後の台湾アイデンティティは「親日にあり」と人々は気づいた

渡辺 しかしやがて、これも先ほど言いましたように、日本が戦争に負けて台湾を放棄し、中国国民党が入つてきました。すぐに二・二八事件が起り、長きにわたりて戒厳令が敷かれ、圧倒的な専制政治がその後三十八年も続きました。この時代、台湾人は完全な権利状態で、外省人工リートが全てのパワーを握つていました。

これでもう、日本統治時代に築かれた秩序や規範は失われたんじやないかと、台湾に関心を持つ者はみんな、そう考えました。

ところが、そうではなかつた。一九九六年に李登輝

総統による民主化政策が始まります。もつとも、その前の荷経国の時代に台湾の経済は発展し、ハイテク分野などでも随分と力をつけ、有力な経済強国、新興工業国だと言われるようになります。所得水準が上昇し、中産層が生まれて権利意識が高まり、それが政治的民主化の要求につながつたのです。

九六年からは李登輝時代の本格的な民主化の時代です。この時から現代に至る二十年間に、台湾人は、こういうふうに考えたんじゃないでしょうか。つまり「自分たちの依つて立つ基盤とは何なのだろう」。そして「日本統治が始まるまではひどい混乱社会だった」「日本統治の時代に社会秩序や社会規範が作られた」ということに覚醒したのです。

さらに「その秩序や規範は、国民党の専制時代に潰えたが、今やそれが終わつて民主化の時代だ。それでは、自分たちのアイデンティティは何か」。そう台湾人は自問したのだと思うんですね。

そして行き着いたものが自由や民主や法治です。そしてその淵源は日本統治時代にあつたという自覚が強まつたのです。

反日となつたら、自分たちのアイデンティティが危機に、アイデンティティ・クラクシスに陥ります。反日が台湾にまるでないとは言いませんが、はるかに親日のほうが勝っています。もし親日を否定してしまつたら、自分たちは何者だつてことになつてしまふからです。

李登輝總統による民主化以降、親日意識が強まつた

渡辺 だから日本を高く評価する。これが台湾のアイデンティティなんです。台湾語でアイデンティティを「認同」と言いますが、親日の認同意識が李登輝さんの民主化以降、強まつてきました。蒋介石の時代は徹底的に反日でしたが、民主化以降になつたら親日の度合いがどんどん高まりました。

多くの日本人が台湾好きになるのは、それは向こうが親日的だからで、誰かが教育しているからじゃありません。互いに自然にそななるんです。これは民主化をやつた李登輝さんの大きな貢献でもありますね。

ついでに申し上げれば、蒋介石の時代には非日本化、つまり反日をやつたわけですが、その前の日本統治時代にすでに台湾では、日本の高等教育を受けるな

どして、立派な人が育つていたんです。

今の国立台湾大学、つまり統治時代の台北帝国大学は、九州帝国大学や名古屋帝国大学より以前に開校しているんですよ。そもそも宗主国が植民地に大学を作るなんて、私が調べた限りでは例がありません。ちなみに今のソウル大学、京城帝国大学もありました。

その高等教育を受けた台湾のエリートは、蒋介石時代に徹底的に弾圧されました。日本語をしゃべり、日本的なものの考え方をする台湾人なんて、外省人にとつては許せないわけですからね。

そこで彼らの多くが日本に亡命してきました。彼らが民主化時代になつて再び台湾に帰つて行つたわけです。そういうエリートたちの深い日本認識が、民主化時代、日本理解をさらに深めた。そういう効果も大いにあつたと思います。

日本は中国の顔色を見て台湾との国交を築けずにいる

渡辺 もちろん今でも、部分的には反日はあります。特に国民党の中にはある。しかしその国民党の人々も含めて、基本はやはり親日です。日本にとって、その

とんでもない“観念国家”李氏朝鮮を日本は併合した

台湾とは対照的に、韓国は異常なほど反日ですが、この韓国の反日についてお話を進めていただければ。

渡辺 韓国の反日姿勢については「どうしてここまで」という感じですよね。日本人の多くがそう考えています。李榮薰先生(元ソウル大学教授)の『反日種族主義』が今、日本で注目されています。「韓国はおかしいよ。なぜなんだろう」という気分があつて、四十万部を超えるベストセラーになつてしています。

では、韓国はなぜここまで反日ののか。これも歴史に由来するんですよ。

一九一〇年、日本は朝鮮を併合し、統治を始めます。併合前の朝鮮というのは、ご承知のように李朝、李氏朝鮮です。これは五百年以上続いていた王朝でした。この王朝はどういうものだったかというと、日本人には信じられないような、大変に強固な「イデオロギー国家」でした。観念国家と言つてもいい。単純に言えば儒教の中の朱子学ですが、それに基づく道徳國家ですね。

日本の政治家の中にも親台湾の人がいて、日台議員連盟や日華懇として集まつたりはしています。しかし親中派に比べれば、やはり規模は残念ながら小さいですね。

子は親に、妻は夫に、女は男に、身分の低い人は高い人に従う、という上下関係が決定的に強い社会です。

だから李朝の王様は大変な権力者でした。そして「両班（ヤンバン）」という秀才の官僚エリートたちが朝鮮王を取り巻いて、王朝体制を固めていました。ソウルは漢字で京城と言いますけど、城壁に囲まれている。そのお城の中に住まう者だけが人間で、それ以外は人間とは考えられないなかつたような社会でした。

当時のイギリス人の女性人類学者、イザベラ・バードは『朝鮮紀行』という本を書いていますが、彼女は朝鮮について、「奪う者と、奪われる者の二つしか存在しない」と語っています。私も、バードの言うような、そういう状態だつたと思いますね。

劣等感の裏返しで清朝をも蔑んだ李朝のエリートたち

渡辺 もう一つ、中華主義という言葉があります。そういう考えが朝鮮にもあって、それを人々は「スマール」を付けて「小中華主義」と言っています。小さな中華主義ですね。

李朝の出発点はほぼ、中国で明から清に変わった頃で

国の中権にいる左派の権力者、政治家や官僚や知識人やジャーナリストたちを、私は「新しき両班」だと書いています。圧倒的に強いエリート意識を持った人たちなんですね。

彼らがなぜ反日のかということですが、今言つたことでだいたい察しはつくと思います。

台湾は親日的でなければアイデンティティが保てないと、先ほど言いました。一方、韓国は逆に、反日のでなければ、身の証が立てられないんですね。言わば両者は反射鏡、写し鏡なんですよ。

日本蔑視があれば、当然その帰結は反日です。一番

分かりやすい例は、いわゆる「従軍慰安婦問題」です。これはどういうメンタリティから出てきているのか。ソウルには慰安婦なんてたくさんいますし、また米軍にも慰安婦がありますが、それらに対する反応は、韓国には全くない。

そもそも、従軍慰安婦というのは七十年以上も前の、しかもある一時期にあつたと言わたるものですが、これども、これは朝日新聞が火付け役になつて騒ぎ出しました。朝日自身も後日、「フェイクニュースだつた」ということを認めました。嘘だつたわけです。

す。清朝はもの凄い軍事力を持つていましたし、李氏朝鮮もこれに仕えざるを得なかつた。「事大主義」と言いますよね。少なくとも形式上は清に頭を下げざるを得なかつたのです。

しかし朝鮮人工エリートは、心の中では「清朝なんて」とバカにしていたんですよ。清朝は満州族が作った王朝で、蛮族に征服されてできた征服王朝だと蔑んでいたのです。

そのように中華を純化したもの、中華の本流は清朝ではなく「我に在り」と考えていましたから、日本なんていうのは蛮族が住まつていて、正義も道徳もない国だと見ていたんです。徹底的な日本蔑視です。

それで「中華」の本流は清ではなく自分たち、李朝にあるんだと考へた。まあ、劣等感の裏返しみたいなものですが、ともかくそういう観念で凝り固まつていました。

「反日でなければならない」――韓国「新しき両班」たちの深層心理

渡辺 私は、韓国にはその思想が今も続いていると見ています。先ほど「両班」と言いましたけど、今の韓

それでも韓国は、日本軍の従軍慰安婦だけは唾棄すべきものだという感じになつてているのですよね。

これは言つてみれば、典雅なる王朝――これもカッコ付きですが、「典雅なる」李朝の子女が蛮族たる日本兵によつて陵辱された、という妄想的な感覚なんじやないでしようか。そういう深層心理が韓国「新しき両班」、文在寅たち権力者の中に働いているのだと思ひます。

文政権の権力者は「『大韓民国』は誤つて作られた国」だと考へていて

渡辺 以上のような理解からすれば、五百年以上続いた李朝の強固なイデオロギーを、たかだか三十六年間の日本統治でひっくり返すなんてこと、無理だつたんじゃないかしら。

韓国の左派、文在寅をはじめとする権力者は、李朝時代への「先祖返り」を夢見る「新しき両班」です。李榮蕙先生は、文在寅政権のエリートたちは「今の大韓民国は誤つて作られた国だと考へていて」と書いています。私は「なるほど、上手い表現だな」と思いました。

つまり、大戦後に日本から朝鮮が独立した時に、日本統治時代に遺された悉くを清算すべきだったのに、それができなかつたという苦々しい感覚が彼らにはあるということです。日本の統治時代に日本に協力した朝鮮人を重用して、戦後、今の大韓民国ができた。それは学者にしろ、日本統治時代に仕事をした優秀な朝鮮人を登用しなければ、国なんて作れないのは、分かりきつていたことですね。

でも今となると、これをすっかり清算していかつたことが、どうしても許せない。「だから、大韓民国は間違つて作られた国だ」というふうに思つているらしいんです。

間違つて作られた国であるなら、「もう一回、作りかえなきやいけない」という理屈になります。それが文在寅さんの言う「積弊清算」であり、前の朴槿恵さんのように言つていた「過去史清算」なんでしょうね。

韓国の「反日アイデンティティ」は構造的なものである

渡辺 韓国の権力者が「先祖返り革命」が必要だと考

係との関連で、最後に触れていただければと思います。

渡辺 台湾に対しては国民レベルと国家外交レベルでは、話が違つてくるわけですね。

アメリカも台湾とは断交しています。それでもトンプ政権は、台湾にずいぶんと接近しています。やはりアメリカという国は、しつかりと自国の国益を考えて立ち居振る舞う国だと感じます。

七八年にキッシンジャー、ニクソンが訪中して、米中国交は樹立され、同時に台湾断交となりました。しかしアメリカはすぐに「国内法」として「台灣關係法」という法律を作り、米台関係は断交以前と同様の「同盟」関係にあります。國際條約としては「米中」が公式だが、それとは別に国内法があつて、それに基づいて台湾に武器の売却もできるようになっています。

ところが日本には何もない。漁業協定、投資保護協定など取り決めや合意は三十以上もありますが、これを日本国として担保するための国内法がない。法治國家としては、法律がないと何もできないんです。もちろん国交がないから、交流協会や関係協会などの民間窓口機関はありませんが、互いに大使館は置いていません。

えているとすれば、もし韓国が親日的になつたら、アイデンティティ・クライシスに陥ります。台湾の場合親日がアイデンティティだけども、韓国がもし親日だったら、それがアイデンティティの危機になつてしまつわけです。ですから韓国の反日は、もう「構造化」されたものだと言つていいのではないか。北は俺たちに比べれば遙かにまつとうだ」と考えているからです。北朝鮮の建国神話なんて嘘話なんですが、北は俺たちに比べれば遙かにまつとうだ」と考えているからかというのも、「韓国は間違つて作られた国だが、付け加えれば、韓国がどうしてあんなに北朝鮮寄りなのかも」といいます。

韓国の左派は心理的にこの嘘話にまんまと引っかかってしまつている。ですから日本にとつては文在寅政権は手に負えない。手の施しようがないんですよ。しかもその次の政権がまつとうになるとも思えません。

では、どうしたらいのかですが、今言つたような構造的なものだという見方で韓国の反日を見るしかない。そうすれば自ずと、韓国との付き合い方が見えてくるんじゃないかと思います。

台湾のお話の所でも少し出ましたが、親日の台湾との交流について、今後どうあるべきか。対「共産中国」開

ですから私は、國際條約にとらわれない国内法、つまり「日台交流基本法」のような法律だけは、何とか作れないだろうかと思って、何人かの政治家にお話ししているところなんです。

そして最後に中国ですが、今回の「新型コロナウイルス問題」でもだんだん明らかになつてきましたが、習近平主席は権威を確実に失いつつあります。

権力が一点に集中すると、ああいう失態になるんでしょう。中国は外交なども誤りなくやる国だと思つている人は多いようですが、そんなことはない。最近の香港の事態を見ても分かるように、何ともお粗末なことはしばしば起こりますよ。

中国の言う「一国二制度」などはあり得ない状況において、わが国と台湾との交流と連帶に関じて示唆しているとき、かつ、反日国家・韓国との関係についてもお話をいただきました。ありがとうございました。

（2月7日 インタビュー）